

学生活動報告会 「ガクマチEXPO」



期日 3月20日(水)

場所 生涯学習センター 7階ホール

町田・相模原地域でボランティア活動を行っている大学生たちが、活動紹介や手作りブースでの交流を通して、日ごろの成果を広くPRする。若い世代との連携や地域活動を広げる新たな機会として、地域に対する大学生たちの熱い想いに触れてみよう。詳細は「学生活動報告会」で検索を。13時～16時(入退室自由)入場無料、申し込み不要。

☎ 町田市生涯学習センター 042-728-0071

TOKYO2020テストイベント ボランティア募集



募集期間 3月31日(日)まで(当日消印有効)

場所 町田市市内コース沿道

2019年7月21日に東京都、神奈川県、山梨県、静岡県で開催される自転車競技ロードレースの東京オリンピックテストイベント。町田市では競技運営のボランティア「まちだサポーターズ」を募集中。活動内容は町田市市内での軽微な資機材の設置・撤去のサポートやコース沿道での観戦者・一般歩行者等の整理・案内など。応募締切3月31日。

☎ 町田市オリンピック・パラリンピック等国際大会推進課 042-724-4442

昼も夜も楽しめる 「第3回 あいはら夜祭り」



期間 4月13日(土)・14日(日)

場所 大地沢青少年センターとその周辺

相原の自然を満喫するアウトドア志向型イベント。ドローン操縦、マウンテンバイク講習、サイドカー体験、ヘラクレスレース、乗馬、キャンピングカーなど内容も充実。竹炭焼き体験などの大地沢まるごと体験会、石阪市長の野鳥観察会、アニメ映画上映や頭が少し汗をかく深い話も楽しめる。出店や宿泊、体験会フリーパス等は有料。HPで3月末まで要申し込み。

☎ 実行委員会事務局(二驥工房) 042-775-5358

「小野路やまいち 2019」



期日 4月20日(土) 予備日:21日(日)

場所 家具工房 KASHO & やまの広場

緑豊かな小野路の山を舞台に行われる人気のマーケット。町田市や近隣の作家による家具や陶器、アクセサリー、文房具、アンティークなど40を超えるこだわりのショップと20を超えるフードコート、さらにライブステージ、ワークショップなど小さな子どもから大人までたっぷり楽しめる充実のマーケット。10時30分～16時。公共交通機関や徒歩での来場を。

☎ 小野路やまいちの会事務局 050-5580-7133

気軽に農にふれてみよう! 農業体験農園利用者募集



期間 2019年3月～2020年2月

場所 あした農場・たがやす

割り当てられた区画内で種まきから苗の植え付け、収穫まで年間約20種の野菜作りを体験できる。個人や子ども連れ等を対象に自然観察や食育も行う「たがやす・小野路農園クラブ」。羊や日本ミツバチも飼育する自然豊かな畑で、無農薬栽培が体験できる「あした農場(渡辺)」の詳細は、HPかFacebookから。援農ボランティアも募集中。

☎ たがやす 090-3435-8611(小野路町743)

☎ あした農場 090-7219-0047(小野路町750)

人がつながる LaManoの鯉のぼり



期間 3月中旬～5月初旬

場所 福祉事業所クラフト工房LaMano

福祉事業所クラフト工房LaMano(町田市金井)の鯉のぼりは、毎年250セットが完売する人気の品。木綿に型染で藍や草木などから抽出した染料で模様を染めていくこだわりの鯉のぼりは、矢車飾り、吹流し(五色)、真鯉(紺色)、緋鯉(茜色)、子鯉(水色)のセット。工房で直接実物を見ることが可能(土日祝定休)。「小野路やまいち」にも出店する。

☎ クラフト工房LaMano 042-736-1455

まちびと写真館

其の十二

小野路の細野家 大正末期から昭和初期



ガラス乾板が見つかった土蔵は当時の骨組みを残し3階建てから2階建てに改修した。今ではギャラリーとして季節ごとに趣向を凝らした展示やイベントを行っている。

撮影した場所

町田市小野路町



時代と共に歩んだ名家

板塀と美しいせせらぎが昔の面影を残す小野路宿通り。江戸時代、大山阿夫利神社の参拝客が行き交う宿場町として賑わった小野路には六軒の旅籠があった。宿の角にあった旅籠「角屋」を営んでいたのは名主の細野家。旅籠以外にも荒物屋や質屋業を営み、周辺の村々へも貸し付けを行っていた。明治から昭和にかけて、当主・細野利篤氏は群馬の製糸会社「碓氷社」の地方組合「甲寅組」の理事として経営手腕を発揮。その後、関東大震災で家屋は倒壊したが、昭和4年に再建された。

2013年にオープンした里山交流館は、当時の間取りをほぼそのままに生まれ変わった小野路の観光拠点。改修時に土蔵から偶然見つかった151枚のガラス乾板には、人々の生活や当時の風景が写し撮られていた。ガラス乾板は幕末から昭和初期頃まで使われた大変稀少なもの。行儀よく並ぶ3人の子どもたちが誰なのか定かではないが、生きていれば90をゆうに超えているであろう。時代を超えて甦ったモノクロームの世界から、子どもたちの息づかいが聞こえてきそう。